

福岡県北部地方の方言アクセント：若松半島の方言 アクセントの実態と共通語化

添田，建治郎
山口大学文理学部講師

<https://doi.org/10.15017/12129>

出版情報：語文研究. 39/40, pp.57-67, 1975-06-01. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

福岡県北部地方の方言アクセント

—若松半島の方言アクセントの実態と共通語化—

添田 建治郎

一 調査にあたって

福岡県東北、北部地方—豊前、一部に筑前の東北部を含む地方—に行われる所謂「豊前アクセント」¹⁾の実態について、あるいは一部にせよ何らかの形でそれに触れるところのあつた論考としては、金田一春彦氏の「對馬附壹岐のアの地位」²⁾、「對馬の自然と文化」、平山輝男氏の「九州方言音調の研究」³⁾、更には都築頼助氏の「方言の実態と共通語化の問題点—福岡」⁴⁾、「方言学講座」第四卷、方言地理学的見地から一部に数語のアを項目に加えている小野米一氏の「九州北東部方言の方言地理学的研究(Ⅰ)」⁵⁾、「北海道教育大学紀要」第20巻第1号)などがみられるが、豊前アを専らに対象とした上で、体系の緻密な記述になるア研究としては平山氏の労作を挙げなければなるまい。

この度の筆者の調査では、調査の対象となる語彙を吟味、選択するに当って、極く一部には漢語を含めるものの、主として和語に対象をとり、所謂古辞書、音義書、声明、論議書—金光明最勝王経音義、類聚名義抄、字鏡、和名類聚抄、色葉字類抄、法華経单字、四

座講式、補忘記³⁾における声点、胡麻点の記載によって、京阪アでの歴史的なア型式を辿ることができ、従つて類別を確定することの可能な28語を第一義に採ることとした。一例を「風」に求めれば、「風」は、

風カセ (観、名義抄、僧下51) カセニ (大慈院本四座講式)

など、古辞書、声明、その他でのアの記載が一樣に●▼⁴⁾とあつて異同がないところから、今日の京阪アでも一類所属語と定める。一方、この様な歴史的なアの記載は文献に見出し得ないものの、平山氏編「全国ア辞典」本文での京都、東京、鹿児島各地の現代方言アで、その類別に異同のみられない「青」(京都^{1,2,3)}、東京^{4,5)}、鹿児島⁶⁾五類)などの33語と、これに、東京を除く二地点では異なるない「妻」(京都²⁾、東京^{4,5)}、鹿児島⁶⁾二類)などの5語を加え、それぞれ、該当する語の右肩に○、く印を施して28語との間の区別を明らかにした。ただ、古辞書、音義書、声明、論議書の声点、胡麻点によるアの記載と今日の京阪アにおける型式との間に、歴史的、普遍的なア変化を考慮してもなお異なる認められるような場合、例えば「粒、友」2語は

古辞書の記載に、

礮^{ツツ}（観・名義抄・法中4）、礮^{力連反}
去薄石（天治本新撰字鏡）

友友トモ（観・名義抄 僧中52）

とあり、前者は新撰字鏡の記事によつて「礮」が「薄石」で丸いツブラ、ツブリに通ずる「粒」○であり、後者については挙例の他の17例の加點、施諸例がいずれも●とあるところから、今日の京阪アでの①、②の現実よりも古辞書のア記載の方を重くみ、型の対応の原則に基づいてそれぞれを二、一類所属語として扱つた。あくまでも今日の豊前ア—その一例としての若松半島の方言アの体系と、新たなア変化とを含めた実態を明らかにし、それらの現象の吟味を行うという立場に立つて調査語彙の大半を古辞書などの文献の、声点、胡麻点による歴史的なアの記載を拠り所とした類別に従つて採り出した。与えられた紙幅を勘案してこの度は二拍名詞による若松アの報告に限定した。調査語彙総数326語、一類一五類は内訳にしてそれぞれ99、45、106、46、30語である。

調査地域の若松半島は福岡県の北端に位置し、北を響灘に接し南に洞海湾を抱く小さな半島である。旧国名の上では筑前国に属するが、今日筑前アは全く行われず地域的には隣なる豊前アの地帯におし並べて含まれる。半島の大部分を占める旧若松市、現在の北九州市若松区は、嘗ての北九州五市の中で戸畑市と並んで人口が少なく、此の方10万を遠く越えることはなかつた。経済的方面でも、筑豊炭田の石炭積出港として戦前、戦後にかけての一時期隆盛を誇つたが、昭和30年代後半に筑豊を襲つた閉山の嵐の波を強く被り、地盤沈下は否めない。人口流動

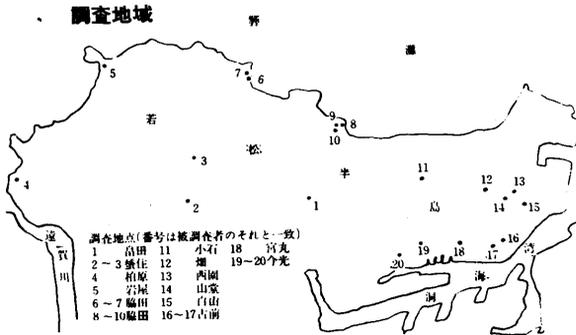
は比較的穏やかであり、半島の北、西部には依然として広く農漁村集落が点在する。豊前ア地帯の一地域としてこの若松半島を選んだについては、筑前国に属しながら豊前アを専らにし、筑前ア地帯との境界に近く種々の特徴的な方言事象解明の要ありと認められるにも拘らずこれまで本格的なアの報告はみられないこと、筆者の出身地であるところから、被調査者をはじめその他様々な面での協力を得易く、内省も可能である故、調査を進める上に便宜であつたこと、などの事情による所が大きい。昭和48年10月一49年9月の略一年間にわたる調査である。

調査方法。被調査者にはその土地生抜で（両親の中、少なくとも片親も同様）、異なる方言ア地域への移動歴を言語形成期に持たず、現在でも一日の大半を方言生活の営みの中に過していること、などの条件によつて臨んだ。調査語彙表の作成に當つて、語彙の配列は基本的にはアイウエオ順としたが、同音語が連続するような場合、先行する語の発音によつてもたらされた先入観が、後続する語のアに影響を及ぼすことのないよう、順不同に組み換へするなどの配慮を加へた。付属語として主格助詞「ガ」を伴つた文節、所謂基本節を単位として、日常のごく親しい人と寛いで話をするような状態でのアを観察することとし、殊更改まつたよそ行のアや、読む調査の常に陥り勝ちな単調な調子に流れての教科書の「無造作な棒読み」による音声学的なアを記録することのないように留意した。聴き取り難かつたり、筆者の内省との比較で不審を抱く語については再度その点を質してアを確認し、併せて、被調査者の了解を得てそれら発音の総べ

てを書き取りテープレコーダーに収めて、調査者の側の不注意によって記録に誤りを留めることのない様心懸けた。

被調査者として次の21名の方々に御協力を戴いた。

- 1 大庭ウメノ
- 2 笠井寿市
- 3 松尾由美子
- 4 川上一郎
- 5 本田清七
- 6 山口アリヨ
- 7 亀津敏宏
- 8 篠原昌枝
- 9 吉村弥吉
- 10 林カヅミ
- 11 大庭喜一郎
- 12 安田久子
- 13 喜多宗代
- 14 塚本智子
- 15 田中弘光
- 16 古田恒、洋子
- 17 古川鹿雄
- 18 古田英生
- 19 鶴本明子
- 20 副田喜八郎



二 若松半島の方言アの実態

『全国ア辞典』比較語彙表では二拍名詞は143語について調査が行われている。それによれば、大分(豊前)アの体系は一・二類○●▽、三類○●▽、四・五類○●▽の形態をとるが、それら各類所属語のうち、大分アであれば本来とるべきはずの右記それぞれのア型式に従わずに例外的に他のア型式に発音されている語としては、○●▽たるべき三類所属語「神」1語が○▽に行われているのがあるばかりで、その他には同様の異例を見出すことはできない。若松アの実態もこの比較語彙表所収143語によって描き出す限りでは、詰る所、一・二類○●▽、三類○●▽、四・五類○●▽と変らず、僅かに「神」に加えて三類所属語「斧」1語が新たに頭高型をとるということではかない。これらの事実からは、恰も「斧、神」2語における○●▽↓○●▽のア変化は普遍的な傾向とは言い難く、若松アでの特殊な例外現象としか考えようがないかのごとくである。ところが、前記調査語彙二拍名詞326語を対象として調査に臨んだ場合に、前記調査語彙二拍名詞326語を対象として調査に臨んだ場合にあらわれる「特殊」な変化も決して例外的な現象としてではなく、特定の音韻条件下での新たな音韻変化ないしは個別的な形態変化として、他の多くの類例と共に若松アの特徴的なア変化の一事象と捉えることができ、その意味でも若松アの実態のより正確な把握と意義とを明らかにしように思うのである。

世代・年齢、地域、男女、職業、階層など、言語差・位相、とりわけアの差を齎らす言語外の異なる諸条件には種々あるが、

主として、若松アの記述に当っても最も有意味と目される世代・年齢に焦点を当てて考察を進めていきたいと思う。被調査者は三世代、高年層（60才以上）、中年層、若年層（30才以下）各7名の合計21名、20地点。はじめに高年層の7名を対象とした調査に基づいて語彙表を作成し若松アの体系を明らかにしておきたい。この語彙表（第一表）に掲げてある312語は、調査語彙326語を高年層の被調査者7名の71%以上、即ち5〜7名に当たる所謂「大半」の人々に行われている安定したA型式に従つて分類したもので、各語には先に指摘の通り古辞書など文献のA記載や各地方方言Aでの類別の一致などの裏付けもあつて総べて「異同の極めて少ない語」と考えられる。

第一表

○●▼一類。味。姉。飴。鳥賊。磯。魚。牛。梅。枝。海老。甥。岡。叔母。
 顔。柿。風。蟹。金。鐘。微。株。壁。蚊。帳。雄。傷。君。霧。桐。釘。口。国。
 首。歛。腰。是。先。酒。笹。里。鯖。皿。沢。品。敷。鋤。杉。鈴。裾。底。袖。
 其。鷹。滝。竹。棚。誰。塵。壺。爪。釣。床。何。処。虎。鳥。西。庭。軒。灰。
 箱。端。蜂。鼻。羽。幅。髭。膝。暇。紐。笛。藤。蓋。札。筆。星。薪水。溝。
 道。峯。桃。森。槍。床。嫁。
 二類。礎。石。岩。歌。内。音。紙。敷。川。北。薮。下。蟬。旅。弦。寺。梨。
 夏。沼。橋。旗。肘。人。昼。冬。町。胸。村。雪。
 三類。麻。海。女。
 ○●▽二類。襟。筑。皆。
 三類。足。穴。網。家。池。犬。芋。色。腕。馬。裏。鬼。親。貝。鍵。髮。龜。
 獲。鴨。皮。菊。岸。肝。莖。草。櫛。熊。倉。栗。怪。我。苦。事。米。竿。坂。
 匙。銷。塩。鹿。舌。鳥。編。蛭。脛。炭。咳。蛸。谷。玉。月。土。綱。角。唾。

毒。年。泥。波。繩。肉。黷。熱。蛋。糊。墓。萩。恥。鉢。花。浜。腹。縁。子。
 骨。堀。豆。店。耳。飯。山。聞。指。弓。夢。脇。綿。五類。噓。
 ●○▽一類。椅子。二類。雲。丹。彼。牙。杭。粒。妻。富士。

三類。斧。神。靴。雲。桑。恋。霜。大。刀。民。×。茄子。×。猫。海。苔。孫。毯。鞆。
 四類。跡。栗。息。板。糸。稻。今。白。海。瓜。帶。笠。洋。数。肩。角。絹。
 杵。維。管。此。処。精。汁。筋。其。処。外。側。蕎。麥。空。種。父。罪。中。何。
 喉。鑿。箸。肌。母。針。船。松。味。啗。麥。藁。

五類。青。秋。朝。汗。雨。井。戸。桶。牡。蠣。陰。蜘蛛。蛙。琴。蛙。猿。白。
 足。袋。露。鶴。鍋。生。葱。春。蛭。鮎。前。窓。眉。股。夜。

若松アの体系は大分（豊前）Aに同じく一・二類○●▼、三類○●▽、四・五類○●▽となつてゐる。しかしながら、傍線を施した29語は、それぞれの語の型の類別からみて若松Aであれば本来とるべきはずのA型式には行われずに他の型式に発音されている。わけでも一類所屬語「椅子」、二類所屬語「雲丹」「富士」7語、三類所屬語「斧」「鞭」15語の計23語にも及ぶ各語が揃つて○●▽に発音され、あるべき一・二類○●▼、三類○●▽の形態が失われている。これは「全国A辞典」比較語彙表所収の二拍名詞143語をもとに調査した大分（豊前）Aにおける同様の語が、三類所屬語の「神」僅か1語に、若松Aの場合でも「斧、神」2語に止まるといふ状態の比ではない。しかも、型の類別からみて若松Aであれば本来とるべきと思われA型式○●▼、○●▽に発音されている他の多くの一・二、三類所屬語諸語の場合と比較して、これら23語の殆どに頭高型化を遂げるに相当と思われる言語内の互に共通する諸条件が備わつてゐることに注目しておきたい。例えば、○●▼↓○●▽

と変じて新たに分化した三類所屬語15語の中、「神、靴、靴、恋、太刀、民、茄子、海苔、蓼、鞭」9語の場合は第二拍が〔 α 〕〔 ϵ 〕いずれか単独の狭母音、従つて二重母音を形成するか、それらの狭母音を含む特殊音節となつており、発音上の負担（単独に高いアを荷い滝を持つ）の軽減をめざして第二拍が高音部を第一拍に前送りして低下する、所謂頭高型化を遂げ易い条件を備えている。―五類が○●▽をとる静岡県浜名郡新居町でも「戀」は○●▽と變じており類別に依らずして内的な音韻環境を条件とすること明らか―特に「恋」を除く8語の中6語までがその第二拍の子音〔 α 〕〔 ϵ 〕〔 ϵ 〕〔 ϵ 〕〔 ϵ 〕〔 ϵ 〕をもち、調音法は様々ながら調音位置の点では両唇、齒茎音に偏つており、頭高型化を遂げることによる過重な負担の軽減意図にも適いその蓋然性に思い到る。ただ、この様に「神、民」2語が頭高型化する一方では、これと第一、二拍の音韻環境を同じくする「網、波、闇」などの語や第二拍がこの9語それぞれと同じ条件下にある三類所屬語でも、「貝、炭、土」をはじめとする11語はいまだ○●▽に行われるなど音韻変化に遅速があつて一様とはいえず、規則性、普遍性を帯びつつも、なお個別の側面のあることも否定できない。また、個々の語、共通の性格を帯びた数語の上には心理的な形態変化を見出すことができる。「雲、桑、霜」3語の場合には、それぞれに同音語「蜘蛛、鉄、下」があり、これらとの間に同音衝突を起したことが考えられる。その際、「雲」は五類所屬語「蜘蛛」の α ○●▽と紛れて混同をきたし、「桑、霜」の場合は「鉄、下」との間の意義弁別を明らかにする必要からそれら2語とは聴覚的により明確に異なる α 型式が、つまりはいずれも○●▽が選ばれたも

のと思われるが、「霜」には、意義の上から対語となる「露」の α ○●▽へ類推した一面も考えておきたい。先に音韻変化によつて説明した「海苔」「神」の場合にも、それぞれに同音語「糊」「紙」との同音衝突の際の α の混同、意義弁別の結果生じた頭高型化、という形態変化の側面も見落すことはできない。「猫」については、東京 α で「亀、鴨、鳩」が○●▽をとらずに一樣に○●▽に行われるのと同様動物名に相応しい α 型式として○●▽に、また、「斧、太刀」の2語と二類語「妻」などは、生活、精神様式の変化に伴い日常の方言生活で口にはずす機会が少なく寧ろ「かたな」や「姉」に対する「お姉さん」に類する親称の方を用いて耳慣れなくなり、若松 α の基本形 α ○●▽に発音されることになつたものと思われる。二類所屬語「富士」の頭高型化も耳慣れぬ地名として後者に類する。この様に6語が○●▽から○●▽へと辿る形態変化には様々な要因が働いており決して一様ではない。一、二類所屬語についても、例えば「椅子、雲丹、杭、粒、富士」の5語は第二拍に単独の狭母音〔 α 〕〔 ϵ 〕か、そのいずれかを含む特殊音節が来、「雲丹」は海産動物名、「彼、牙、妻」3語―三類所屬語「恋」も―は印象の強調、斬新な洒落た表現を狙いつて行われた一面もある。など音韻、形態面変化の場合共に頭高型化を齎らすに足る互に共通した言語内の諸条件を備えている。

一、二、三類所屬語の中で、頭高型化を遂げることで分化から統合へという音韻変化の原則に敢えて逆らうこれらの語については、前記23語も含めてそれらがより若い世代でどの様に推移しているかを比較・検討することによつて、 α 変化の

実態の正確な把握とその現象のもつ意義、共通語化の働きなど、他方言との交渉関係にもわたるより綿密な考察を進めることができよう。第二、三表は若松半島の中年層、次いで若年層に行われる方言アの体系を明らかにしたものであるが、各A型式に所属する語の認定方法は第一表の場合を踏襲した。その際、中若年層において、高年層のそれとは異なるA形態が7名の被調査者の中5名以上に新たに一致してあらわれ、分類に異同の生じた語に限って掲げることとし、高年層での分類に変更を要しない語はすべて省略に従った。

第二表 中年層

○●▽三類 岸 堀 四類 他

○●▽一類 的 二類 鞍 寺 技 三類 鯛

○●▽一類 姉 三類 膿

第三表 若年層

○●▽二類 蕪 三類 岸 谷 四類 他

○●▽一類 沢 二類 鞍 三類 海 苔

○●▽一類 姉 杉 友 藤 二類 門 弦

三類 泡 膿 貝 龜 鴨 熊 鯛 蛸 萩

若年層の場合、一、二類所属語「沢」、「鞍」の2語は○●▽に行われ、逆に、本来○●▽をとるべき三類の「岸、谷」が○●▽に発音されるが、いずれの語も各世代によってAが一定ではなく揺れが頗る多い。それも周辺の農漁村よりも市街地の被調査者に比較的偏ってあらわれる。三世代を通じて一貫して○●▽をとらずに○●▽に発音される二類所属語「襟、皆」2語の場合は東京アの習得として措き、これら4語のAは屢々○●▽

と○●▽との間で言い直され躊躇があつて揺れており、無造作で単調な一本調子の発音や、それとは逆の緊張などに伴って齟らされた音声学的なAであらうと思われる。

また、一、二、三類所属語の中で既に高年層において頭高型化を遂げている前記「椅子」・「鞭」の23語は、本来のA型式○●▽に発音する被調査者が3名を越える「海苔」1語を除いては、中年層においてもその頭高型化の傾向が概ね変更なく受け継がれているが、中年層の被調査者の中に50代の農漁村生活者が3名を数えるという年齢構成の事情もあつて、この世代になつて新たにあらわれる頭高型への変化例としては、僅かに一類所属語「姉」、三類の「膿」の2語を加えるに止まっている。ところが、更に若い世代、若年層になると頭高型化の傾向は著しく進み様相は一変する。一、二、三類所属語でありながら分化して頭高型○●▽に発音される語は、この世代で新たに○●▽をとる破線を施した15語と、高、中、そして若年層の三世代を通じて○●▽である前記22語(○●▽に行われる「海苔」1語を除く)との合せて37語である。これら37語のいずれにも、音韻変化なり類推を主とする形態変化によつて頭高型化を遂げるに相当と思われる種々の言語内条件を見出すことができ、先の○●▽○●▽相互間の変化に較べて、より一般的に起きるA変化の傾向であることは言うまでもない。今、これらのA変化を分類基準に従つて上位から下位へと二分法分類すると、

A 基本的に言語内条件に規定されて起きる頭高型化

a 特定の音韻環境のもとで規則的、普遍的に起きる音韻変化

I 第二拍に狭母音をもち発音の容易化をめざす語

- (1) 単独の狭母音音節——貝 杭 恋 鯛
 (2) 狭母音を含む特殊音節——椅子 雲丹 屨 神 靴 杉 太刀 民 粒

弦 茄子 萩 藤 富士 穂 鞭 (海苔)

II 第一、二拍に母音の特定の組み合わせをもつ語⁽¹⁰⁾なし
 b 個別、又は数語の上に共通して起きる心理的な形態変化

I 特定の語との対応関係のある語

- (1) 同音衝突——(イ)紛れてアを混同——泡 屨 門 雲 弦 藤

(ロ)意義弁別の上からアを区別——神 桑 霜 (海苔)

II 特定の語との対応関係のみられない語

- (1) 印象の強調、洒落た斬新さなど

話者の表現効果をめざす意図——彼 牙 恋 妻 友

- (2) 語性、語感を共有——(イ)動物名——雲丹 亀 貝 鴨 熊 鯛 蛸 猫

(ロ)耳慣れない名辞、古語臭の漂う語——姉 斧 門

彼 太刀 友 妻 富士

B 言語外条件に規定されて起きる頭高型化——世代差、地域差による。

この中、A a I (1)の「貝」は東京アでも●○▽に行われてい
 る。この「貝」を、三類所屬語の中では「金」「塔」と共に●
 ○(出自)↓○○(現代)のA変化を遂げず依然として今日
 まで●○に残った僅かな例とする見方と、一端○●に変化した
 上で再び●○に戻ったものともみる考え方の二通りが行われてい
 るが、若松アの場合に限つていえば、高、中年層では「鯛」と
 共に○●▽がむしろ一般で、「貝」の●○▽が専らとなるには
 若年層まで待たなくてはならぬ故、仮に若松アの三類にも東京
 アと同じ●○↓○○の変化過程が嘗てあったとするならば、「貝」

は他の三類所屬語各語と足並みを揃えて一端は高、中年層に一
 般的な○●に転じ、第二拍に単独の狭母音(ハ)が来、従つて
 二重母音を形成するという音韻環境、「亀、鯛」に同じく動物
 名に相応しい語性の反映という事情から、出自のA型式●○に
 戻るといふ結果を招来する頭高型化を遂げることになったもの
 だ。

第四表

語	世代		
	高年層	中年層	若年層
貝	○●▽	○●▽	○●▽
杭	●○▽	●○▽	●○▽
恋	●○▽	●○▽	●○▽
鯛	○●▽	○●▽	○●▽

もあれば、他方では中、若年層に至ってはじめて頭高型化を遂
 げる語が15語を数えるなどの事実とも関連して、音韻変化が規
 則性、普遍性を帯びつつもなおそこに個別的な側面のあること、
 そして心理的な形態変化の場合でも同様であることいずれも既
 に触れるところでもあった。

また、A b II (1)にいう「話者の表現効果をめざす意図」は、
 文例□君は誰だ、□君は美しい、を派生節のAとして若松アで
 観察する際、□によれば被調査者の中の幾人かに文節「君は」
 を●○▽に発音する傾向があり、これが□になると例外なく一
 類所屬語本来の○●▽に行われ、疑問文の場合と否との場面に
 対する話者の認識の差が「君は」のAに○●▽、○●▽の形態
 差として反映するような働きを指す。疑問文「何処に行くのか」

の文節「何処に」が●○▽に発音されることがあるのもこれと同根であるが、東京アの「誰、何処」の場合にもかかる傾向のみられることは夙に指摘がなされてきたところである。

三、若松半島の方言アにみる共通語化

若松アの若年層の場合に、頭高型化を遂げる語の一、二、三各語ごとの傾向をただ語数という点からのみ眺めれば、三類所属語ばかりが23語で、一類のその5語、二類9語のそれぞれ4.6倍、2.6倍と圧倒的に多いかみえるが、これらの頭高型化する語が各類所属語全体に占めている割合を第五表にみると、二、

第五表 ●○▽をとる語数と、その調査対象に占める割合

三類	二類	一類	類別	
			世代	語数
106	45	99語	高年層	1語
(14.1)	(15.5)	(1.0%)	中年層	2
16	7	5	若年層	5
(15.1)	(15.5)	(2.0)		(5.1)
23	9			
(21.7)	(20.0)			

三類所属語にあらわれる頭高型化の割合は三世代を通じて14、22%の間で互に略同率を呈し、剩え若年層に至る5%余りの著しい増加にも替を並べるが、ひとり一類の頭高型化だけは極めて低率を示して顕著である。このことは頭高型化の傾向が三類所属語にのみ偏重するものではなく、一類を除いた

二、三類両類所属語に共通する傾向であることを示すものにも他ならない。二、三類が共に●○▽をとって合併し区別のない東京アならば、第二拍に(一)(二)(三)単独の狭母音節ないしはそれらを含む特殊音節がくる際に両類一様に第二拍の高音部を第一拍へ送って頭高型化を遂げる傾向があらわれるとか、形態変化としてのア変化が起きることは十分考えられる。しかし、若

松アでは二類は第二拍に単独のアの山がこず、また、二、三類は異なるア型式、●○▽、●○▽をとって統合しない、その点で互に音韻条件の顕著な相違を有し、二類は●○▽をとって一類と区別を失って合併している。にも関わらずこの二類がごと頭高型化に關しては一類とではなく三類との間に三世代を通じて一貫して足並みを揃えるのである。ここには他の方言アの強い影響をこそ考えなければなるまい。第六表は、東京アにおいて一、二、三類所属語でありながら頭高型化する語の割合を「全国ア辞典」本文の記述をもとに整理したものである。

第六表 第五表と同じ (内訳)

三類	二類	一類	類別	
			方言	語数
106	45	99語	東京ア	3語
(17.9)	(17.8)	(3.0%)		

一類 誰 何処 友
二類 雲丹 門 彼 牙 杭 粒 妻 富士
三類 漁女 芥 貝 神 亀 鴨 雲 桑 恋 匙 鯛 蝸

もとより東京アの体系は一類●○▽、二・三類●○▽、四・五類●○▽である。若松アは型の種別の上ではこの三種を有して何ら変るところがないものの、二類が●○▽、三類●○▽と両類が分化して統合しない点で異なる。ところが、東京アでの頭高型化の傾向は一類所属語では3%と極端に低く、一方二、三類のそれは揃って18%に近く高い。これは若松アにおける中年層と若年層の平均値に相似している。この符合は「若松アに働く共通語化」の見地からは見逃すことができない。仮に、第六表にみるような東京アでの頭高型化の一般的な傾向が若松アの高年層のそれよりも低い割合を示すか、少くとも両者が同様の割

合を呈するようであるならば、目下の若松ア二、三類所属語に共通してあらわれる頭高型化の傾向を、東京アにおける同様の傾向との関連において考える余地は少なくなると思われる。若松アの共通語化なるものが、高年層にはまだ十分には働かず、主として若年層に対して働く固有の新しい要素、例えば、人口流動、放送文化の発達、学校教育の普及などによる、若松半島の方言アに対する話者の規範意識の薄らぎを衝いて起さる現象と考えられるからである。ところが実際には、若松アにあって頭高型化を遂げる度合が東京アの傾向により近いのは、高年層のそれではなく増加傾向にある若年層での20%を越える数値の方であり、高年層の14、15%という数値についても東京アの17、18%を下回ってむしろ自然である。頭高型化を遂げる語を具体的にみても、東京アにはない若松ア特有の語としては、高年層からみられる「椅子、霜、孫、毯」4語、若年層にだけあらわれる「姉、泡、膿、熊、杉、弦、藤」7語の合せて11語―東京アの若年層ではこれら11語を○▽に発音することがある―が「友」をはじめとする25語（第六表傍線部分）はすべて一致している。逆に、東京アでは頭高型化しているのに若松アで依然として○●▼、○●▽が大勢を占める「海女、匙、誰、何処、矛」の5語についても、すべての被調査者が各語各類本来の○●▼、○●▽をとるわけではなく、いまだ5名以上には達しないものの若年層を中心に○●▽に発音する者が多くなって、東京アの傾向に近付いていることは否めない。これに関連して、第二拍に単独の狭母音〔i〕〔e〕か、それらいずれかを含む特殊音節がくるといふ特定の音韻環境のもとで比較的音韻変化を起し易い

方言アとして、豊前アに隣接し、一、二、三類ともに等しく○●▽をとる筑前アを吟味しておきたい。第七表に示すように、筑前アでは頭高型化する語が二、三類はもとより、

第七表 第五表 筑前アと同じ

類別	一類	二類	三類
	99語	45	106
筑前ア	8語 (8.1%)	9 (20.0)	18 (17.0)

高山國彦氏 70才 (遠賀郡遠賀町)

一類所属語でも東京ア、若松アに較べて8.1%と増加する傾向にある。それも「蟻、椅子、柿、雉、薪」など、第二拍到狭母音の〔i〕〔e〕いづれかを含む特殊音節がくるといふ特定の音韻環境のもとで行われたと見做される語が多くなっており、東京ア二、三類所属語にあらわれる○●▼↓○●▽の頭高型化傾向が、筑前アの場合一、二、三類が一様に○●▽をとってA型式の上で一類と二・三類との間の区別が失われている故、一類所属語にも及ぼされたものと考えられる。纏ってこれを若松アでは一類の頭高型化が東京ア同様極めて少ないという事実との関連で考えてみると、同じように東京アの影響を受けるにしても、若松アの場合には一類のA型式が○●▽ではなく○●▼であり同じ○●▼をとる東京アの一類が○●▼↓○●▽の頭高型化傾向では3%と低率を示すという両事実の符合に思い到る。若松アでは筑前アの場合とは違って、一類所属語の中から頭高型化していくような語が少ないということ、その現象あることが却って若松ア自身が東京アの影響を受けながらも、互の持てるA体系の違いによって筑前アとは異なる対応をなしたことが、即ち、若松アにおける共通語化の証となっている。この頭高型化という分化の傾向は、若年層に至って新たに一、

二、三類所屬語の中から頭高型化を遂げつつあると思われる語の内訳と、頭高型に発音している被調査者の人数とを各世代ごとに逐一明らかにすることによって、高年層↓中年層↓若年層と世代を経るに従つて、徐々にはあるが確実にその傾向の定着の過程をみる事ができる。第八表の中、○印で囲つた「姉」・「萩」までの15語については数値の推移が如実にそのことを物語っており、若年層でいまだ安定していかないものの、4名までの被調査者に頭高型化の傾向があらわれている「雉、歛、誰、何処、匙、匙、匙、具、泡、麻、虹」

語	世代		
	高年層	中年層	若年層
①	1	5	5
②	0	1	4
③	0	1	3
④	0	0	6
⑤	0	1	3
⑥	0	0	0
⑦	0	0	2
⑧	0	0	3
⑨	0	0	7
⑩	0	0	0
⑪	0	0	0
⑫	0	0	0
⑬	0	0	0
⑭	0	0	0
⑮	0	0	0
⑯	0	0	0
⑰	0	0	0
⑱	0	0	0
⑲	0	0	0
⑳	0	0	0
㉑	0	0	0
㉒	0	0	0
㉓	0	0	0
㉔	0	0	0
㉕	0	0	0
㉖	0	0	0
㉗	0	0	0
㉘	0	0	0
㉙	0	0	0
㉚	0	0	0
㉛	0	0	0
㉜	0	0	0
㉝	0	0	0
㉞	0	0	0
㉟	0	0	0
㊱	0	0	0
㊲	0	0	0
㊳	0	0	0
㊴	0	0	0
㊵	0	0	0
㊶	0	0	0
㊷	0	0	0
㊸	0	0	0
㊹	0	0	0
㊺	0	0	0
㊻	0	0	0
㊼	0	0	0
㊽	0	0	0
㊾	0	0	0
㊿	0	0	0

9語などに、若松アで一、二、三類所屬語の頭高型化が失われず、比較的一類所屬語に数を増してなお将来にわたつて着実に深化をみせるとの示唆を読み取ることができる。

四 若松アをめぐる若干の問題

——むすびにかえて——

これまで、若松アの体系、一、二、三類所屬語にみえるア変化としての頭高型化傾向、共通語化の働きなど若松アの実態に

徐々にはあるが確実にその傾向の定着の過程をみる事ができる。第八表の中、○印で囲つた「姉」・「萩」までの15語については数値の推移が如実にそのことを物語っており、若年層でいまだ安定していかないものの、4名までの被調査者に頭高型化の傾向があらわれている「雉、歛、誰、何処、匙、匙、匙、具、泡、麻、虹」

ついて縷々述べてきたが、なかに頭高型化の一要因として同音衝突に触れるところがあつた。一口に同音衝突といつても「雉、撃」の場合には聊か趣きに異なりがあるようで、本来四類所屬語である両語も、「雉」は高、中、若年各層各々7名の被調査者の中0、2、4名が○●▼に、「撃」も0、1、4名は○●▼に発音している。これらはそれぞれ同音の「霧」○●●▼、三類語「蚤」○●▼との間にアが混同をきたして紛れ、○●▼、○●▼に行われたものであろう。各世代の発音者数の推移をみても明らかなく若年層に多く、その上混同は日常あまり口にしない「雉、撃」2語のような語の方にあらわれる。対応関係にある語との間の同音衝突による頭高型化が、どの世代に多くあらわれ、そこに働く話者の表現上の配慮なるものも如何なる性質のものであるかその一端を示して興味深い。同じ四類語で○●▼をとるものでも「他」は東京アの影響としか考えようがない。次に、「襟、皆」2語の類別について。「襟」、「皆」は各地方言アでいずれも二類に行われ、「皆」はまた、皆ミナ(親・名義抄、僧中100)

のごとく古辞書のア記載でもそのことが明らかであるが、若松アではこの両語を殆どの被調査者が一様に三類相当の○●▼に発音して東京アの影響を強く受けているが、特に「襟」は第二拍が狭母音を含む音節なるにも関わらず敢えてアの山を設けて、また、「皆」の○●▼は、より多く用いられる三拍名詞「皆」の基本節のアが○●●▼と助詞「ガ」を低下して発音されており、この多数へと類推したものはあるまいか。このように二類語「鞍、寺、技」の○●▼がみられ、東京アの影響を多

分に窺わせる五類所屬語「嘘」の場合にも○●▽が圧倒的に多く、本来の●○▽に行うのは若年層の2名にすぎない。筑前アでも例外なく○●▽に発音されている。この若年層での2名にあらわれる●○▽の解釈は、「嘘」は若松アでは三類に合併した語であつて、印象の強調の働きによる新たな変化、若松アでは●○▽が本来で○●▽は音声学的なア、東京アの●○▽が別途に習得された、などが考えられるがなお定め難い。

若松アの実態をみる場合、半島内での地域差に由来する位相を見過しえない。第九表は若松半島を大きく農漁村地域(脇浦、脇田、畠田、蟹住、岩屋)と市街

	路地	農漁村	市街地
姉	2	2	2
杉	2	2	2
友	2	2	2
藤	2	2	2
門	2	2	2
弦	1	1	1
泡	1	1	1

麩	1	1	1
貝	2	2	2
亀	2	2	2
鴨	1	1	1
熊	2	2	2
鯛	1	1	1
蛸	2	2	2
萩	2	2	2

地域に区分し、両地域それぞれについて三世代から各2名、合計6名ずつの被調査者を抽出して、先に一、二、三類所屬語の中から若年層に至つて新たに頭高型化を遂げたと見做された「姉」「萩」15語のAについて、実際に両地域でどのように発音されているかをみたものである。農漁村地域では

頭高型化が総体的に鈍く、これに較べ人口流動の多いと目される市街地においては速いことが明らかに窺われる。

この様に若松アの実態報告とすることで、より厳密には両地域それぞれの報告の要あり、その他、この論考との関連で、残る一、三拍名詞、動詞、形容詞Aの記述、吟味、同じような豊前アをとる他地域の方言アとの比較など、世代差に焦点を当

てて若松ア一つを対象に取り上げてても触れるべき課題はなお多いが最早違がない、改めて考察の機会を得たいと思う。

注

- (1) アクセントをアと略称し大字をもって示す。
- (2) 「九州東北部のアとその系統」(上)(下)、「國學院雜誌」47巻1、2月号)に加筆されたもの。
- (3) それぞれ承暦三年本、望月郁子氏「類聚名義抄四體声点付和調集成」所収の諸本(但し観智院本を觀・名義抄と略称)、岩崎文庫本、馬淵和夫氏「和名類聚抄」(古写本本文および索引)所収の諸本、島田友啓氏「色葉字類抄倭訓索引」によつて前田本、同氏「法華經半字假名索引」によつて保延本、金田一春彦氏「四座講式の研究」の語彙総覧によつて大慈院本その他の諸本、「日本語のA」所収同氏「補忘記の研究」の元禄、貞享本を採つた。
- (4) ○は低音、●は高音、▽は助詞「ガラニハ」の低、高音を示す。
- (5) 記号はいずれも「全国ア辞典」に採られた方法に従う。
- (6) 以下、特に断らない限り若松半島の方言アを若松アと略称する。豊前ア、大分ア、東京ア等の名称も同様に当該地方の方言アの略。
- (7) 寺田泰政氏「Aによる細かい方言区画」(金田一博士米寿記念論集)
- (8) 国立国語研究所「現代雜誌九十種の用語用例」など参照。
- (9) 有坂秀世博士「音韻論」金田一春彦氏「音韻変化からア変化へ」(金田一博士米寿記念論集)、「国語Aの史的的研究」に多くを教えられている。
- (10) 「平家正節」の時代●○▽をとる「穴麻鼓皮玉」など、第一、二拍の母音が共に(ア)である語に現代京都アでは○●に変じているものがみられる。
- (11) 金田一春彦氏、註(9)の前掲論文、24ページ参照。
- (12) 同氏「国語Aの史的的研究」参照。

(昭和49年12月20日稿了)